

次元形容詞の意味的遠近

平 澤 洋 一

1 辞書的意味の差異

意味的対立をもつ語の集合としての語彙は、いろいろな意味の階層と語彙体系とを有しているようである。階層には知的意味、評価・感情的意味、文法的意味、表現的意味（連想的意味や修辭的意味）、文体的意味、行動的意味、位相的意味、歴史的意味、地域的意味、文化的意味などが考えられる。また、語彙体系の表示においては、語と語の意味対立の体系的表示（樹形図で示すにせよ四角形や角柱などで示すにせよ）においては、対立関係に加え意味的距離がなんらかの形で表示されていなければならないし、行動的意味や文化的意味はコミュニケーション要素としてのa支配コード、b成立条件、c言語信号、d非言語信号のもつ意味と密接に関連してくるなど、語彙にはさまざまな意味関係が非常に複雑な形で絡み合っている存在しているので、その実態を整合的に説明できるような体系表示の方法が工夫されなければならない。

ここでは次元形容詞語彙を例に、知的意味階層における意味の遠近関係の表示方法について考察する。次元形容詞としては「たかい」「ひくい」「ふかい」「あさい」「ながい」「みじかい」「とおい」「ちかい」の8語を扱うことにし、まず8語の辞書的意味からみていくことにする。

たかい

- ① 帰着点までの上方への垂直的な隔たりがおおきい。

S₁ あの家は天井がたかい。 S₂ 鳥がたかく飛んでいる。

- ② 盛り上がって上の方までである。

S₃ 午後には波がたかくなる。 S₄ 北にはたかい山がそびえている。

S₅ 襟のたかいシャツを着ていた。

- ③ 外部に突き出ている。

S₆ 母親に似ず娘は鼻がたかい。 S₇ あの男は背がたかく鼻もたかい。

※多くのヨーロッパ語では、鼻は「たかい」か「ひくい」かでなく「おおきい」か「ちいさい」か、「ながい」か「みじかい」かでとらえる。東アジアではどうであろうか。

- ④ 帰着点までの抽象的な隔たりがおおきい。
 S₈ 料金がたかい。 S₉ あの方は身分がたかい。 S₁₀ まだ日がたかい。
 S₁₁ たかい熱が何日も続いている。
- ⑤ 優れている。
 S₁₂ この文書は価値がたかい。
- ⑥ 広く知れわたっている。
 S₁₃ これがうわさにたかい宝石だ。
- ⑦ 自慢できる（慣用句）。
 S₁₄ 娘が1位になったので父は鼻がたかい。

ひくい

「たかい」とほぼ完全な対義関係にあるが、「たかい」よりは意味領域が狭くなる。「日」「税金」「気位」「見識」「うわさ」などを主語にとることはできない。「鼻がひくい」という慣用句の用法はない。

ふかい

- ① 起発点から垂直に下へはかった距離がおおきい。
 S₁ 水にふかくもぐる。 S₂ 底のふかい段ボール箱。 S₃ ふかい井戸を掘る。
- ② 奥までの隔たりがおおきい。
 S₄ ふかい洞窟があった。 S₅ まがりくねったふかい地下道があった。
- ③ 程度が並みでない。
 S₆ 今回の帰国にはふかいわけがあった。 S₇ 欲がふかい。 S₈ 考えがふかい。
- ④ 広がりや濃密である。
 S₉ 翌朝はふかい霧であった。
- ⑤ かさが多い。
 S₁₀ 雪のふかい村を訪ねた。

あさい

「ふかい」より意味領域が狭い。広い範囲で「ふかい」との対義関係をもつが、「たかい」「ひくい」ほどではない。「欲」「雪」「縁」「罪」などを主語にできないが、逆に「日があさい」など、「ふかい」が対応しない意味領域での若干の用法を有する。

ながい

- ① 起発点から線条的にはかった隔たりがおおきい。
 S₁ 隣の県に抜けるながいトンネルがある。 S₂ 日本からイギリスまでのながい旅。
 S₃ 象は鼻がながい。 S₄ キリンは首がながい。
- ② 帰着点までの抽象的な隔たりがおおきい（慣用句）。

S₅ 彼は気のながい性格だ。 S₆ 鼻の下をながくする。

みじかい

S₆ に対する「鼻の下をみじかくする」は非文となるが、「ながい」とほぼ完全に対応する意味領域をもつ。

とおい

① 帰着点まで直線的にはかった隔たりがおおきい。

S₁ 日本から南極はとおい。 S₂ 学校は駅からとてもとおい。

② 帰着点までの抽象的な隔たりがおおきい。

S₃ とおい将来のことを考える。 S₄ それはとおい昔の話になった。

S₅ あの人は私のとおい親戚にあたる人だ。

ちかい

「ちかい」は「とおい」の対義用法をほとんどもつ（S₄の対義用法はない）ほか③の用法をもち、「とおい」より意味領域が広い。

① 帰着点まで直線的にはかった隔たりがちいさい。

S₁ 自宅は学校からちかい。

② 帰着点までの抽象的な隔たりがちいさい。

S₂ ちかい将来，教育メディアはおおきく変わる。 S₃ ちかい親戚。

③ ある状態までの残された隔たりがちいさい。ある状態に届こうとしている。

S₄ 正月がちかい。 S₅ 工事は完成がちかい。 S₆ 五百人ちかい人数が集まった。

S₇ 半狂乱にちかい取り乱しかただった。

2 次元形容詞の意味関係

意味関係については、意味特徴、意味特徴の束、成分分析表、それを質的データに置換したマトリックスで示したあと、多変量解析する。また、下記Aの意味特徴については、X₂～X₄で方向性を規定しているので、このほかに〈はかるときの起発点が決まっている〉や〈どちらからはかってもよい〉といった意味特徴をたてる必要はない。

A 意味特徴

〈X₁〉=起発点から帰着点まではかった量が比較規準より多または少である。

〈X₂〉=上方への方向性をもつ。

〈X₃〉=垂直の方向性をもつ。

〈X₄〉=外側への方向性をもつ。

- 〈X₅〉=奥への方向性をもつ。
 〈X₆〉=直線的に距離をはかる。
 〈X₇〉=線に沿って曲がりながら距離をはかる。
 〈X₈〉=距離を測定次元とする。
 〈X₉〉=密度を測定次元とする。
 〈X₁₀〉=かさを測定次元とする。
 〈X₁₁〉=比較規準より量が多い。

B 意味特徴の束

ヤマガッコを必須要素、二重ヤマガッコを焦点化された意味特徴を表す選択要素とすると、次元形容詞語彙8語の意味特徴の束は、下記のような記号列として表示することができる。「ふかい」の〈X₁〉〈X₅〉〈X₇〉〈X₈〉〈X₁₁〉はほら穴などがふかいこと、〈X₁〉〈X₉〉〈X₁₁〉は霧がふかいこと、〈X₁〉〈X₁₀〉〈X₁₁〉は雪がふかいことを表す場合の意味特徴の束である。

たかい = 〈X₁〉〈X₂〉〈X₃〉〈X₆〉〈X₈〉〈X₁₁〉

〈X₁〉〈X₃〉〈X₄〉〈X₆〉〈X₈〉〈X₁₁〉

→X₁, X₃, X₆, X₈, X₁₁が必須要素, X₂とX₄が選択要素

ひくい = 〈X₁〉〈X₂〉〈X₃〉〈X₆〉〈X₈〉

〈X₁〉〈X₃〉〈X₄〉〈X₆〉〈X₈〉

→X₁, X₃, X₆, X₈が必須要素, X₂とX₄が選択要素

ふかい = 〈X₁〉〈X₃〉〈X₆〉〈X₈〉〈X₁₁〉

〈X₁〉〈X₅〉〈X₇〉〈X₈〉〈X₁₁〉

〈X₁〉〈X₉〉〈X₁₁〉

〈X₁〉〈X₁₀〉〈X₁₁〉

→X₁とX₁₁が必須要素, X₃, X₅, X₆, X₇, X₈, X₉, X₁₀が選択要素

あさい = 〈X₁〉〈X₃〉〈X₆〉〈X₈〉

〈X₁〉〈X₅〉〈X₇〉〈X₈〉

〈X₁〉〈X₉〉

→X₁が必須要素, X₃, X₅, X₆, X₇, X₈, X₉が選択要素

ながい = 〈X₁〉〈X₇〉〈X₈〉〈X₁₁〉

→選択要素はない

みじかい = 〈X₁〉〈X₇〉〈X₈〉

→選択要素はない

とおい = 〈X₁〉〈X₆〉〈X₈〉〈X₁₁〉

$\langle X_1 \rangle \langle X_7 \rangle \langle X_8 \rangle \langle X_{11} \rangle$
 $\rightarrow X_1, X_8, X_{11}$ が必須要素, X_6 と X_7 が選択要素
 ちかい = $\langle X_1 \rangle \langle X_6 \rangle \langle X_8 \rangle$
 $\langle X_1 \rangle \langle X_7 \rangle \langle X_8 \rangle$
 $\rightarrow X_1, X_8$ が必須要素, X_6 と X_7 が選択要素

C 質的データとデンドログラム

次元形容詞8語がどのような意味特徴を有しているかを表1に示す。

表1 次元形容詞の成分分析

	X ₁	X ₂	X ₃	X ₄	X ₅	X ₆	X ₇	X ₈	X ₉	X ₁₀	X ₁₁
たかい	+	±	+	±	-	+	-	+	-	-	+
ひくい	+	±	+	±	-	+	-	+	-	-	-
ふかい	+	-	±	-	±	±	±	±	±	±	+
あさい	+	-	±	-	±	±	±	±	±	-	-
ながい	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+
みじかい	+	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-
とおい	+	-	-	-	-	±	±	+	-	-	+
ちかい	+	-	-	-	-	±	±	+	-	-	-

X₁は、次元形容詞語彙を他の語彙（他の形容詞語彙、動詞語彙、名詞語彙、副詞語彙など）と弁別するための意味特徴であるが、従来の語彙論・意味論では、この種の成分分析表にまとめることが研究のゴールであることがほとんどであった。

しかし、これがゴールであってはならない。成分分析表から何らかの方法で脱することで、語彙体系の表示が可能になり、生成文法論で多用されてきた多段式階層の樹形図に近似した形で語彙体系を表すことができるようになるが、当該語彙のすべての語が意味的に等距離関係にあるわけではないので、その実態が投影された樹形図にするべく、本稿では語の意味の遠近関係を反映させたデンドログラムで表示することにする。

表2は、表1の素データを質的データに変換したマトリックスである。これをもとに、8語の意味の遠近を求めることにする。表2の「たかい」と「ひくい」で数字の一致しないのは、X₁₁の意味特徴の場合だけであり、したがって「たかい」と「ひくい」が対義関係にあることが分かる。「とおい」と「ちかい」もX₁₁という1特徴のみで対立し、「ふかい」と「あさい」はX₁₀とX₁₁の2特徴で対立している。しかし、「みじかい」が「ながい」に近いのか「とおい」に近いのか、それとも「ちかい」との意味的距離が近いのか、この表からはやや読みとりにくい。

表2 次元形容詞の質的データ

	X ₁	X ₂	X ₃	X ₄	X ₅	X ₆	X ₇	X ₈	X ₉	X ₁₀	X ₁₁
たかい	2	1	2	1	0	2	0	2	0	0	2
ひくい	2	1	2	1	0	2	0	2	0	0	0
ふかい	2	0	1	0	1	1	1	1	1	1	2
あさい	2	0	1	0	1	1	1	1	1	0	0
ながい	2	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2
みじかい	2	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0
とおい	2	0	0	0	0	1	1	2	0	0	2
ちかい	2	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0

そこで、8語の類似度を一係数により求めると、表3のようになる。これをみると、(6)の「みじかい」ともっとも類似度の高いのは(5)の「ながい」で0.941であり、次いで(8)「ちかい」の0.824である。(1)「たかい」と(2)「ひくい」、(5)「ながい」と(6)「みじかい」、(7)「とおい」と(8)「ちかい」の類似度はともに0.941である。

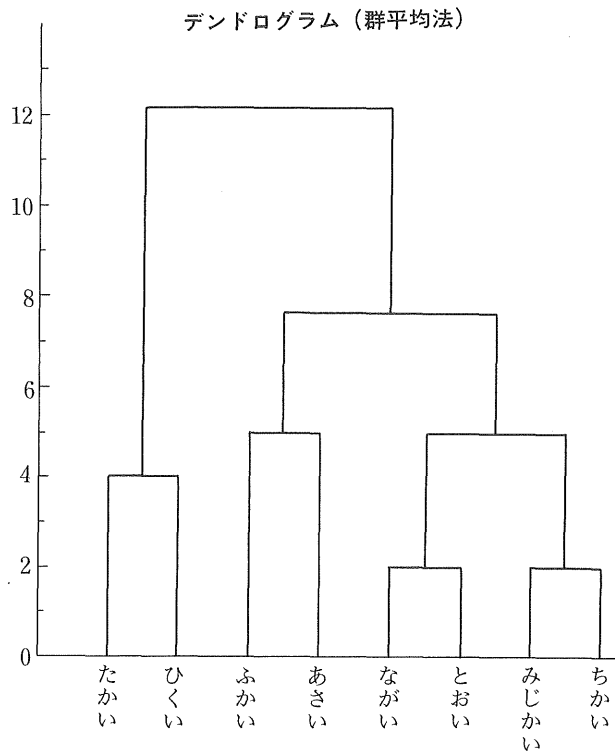


表3 一致係数による類似度

データファイル=次元形容詞-Ruizido
データの数=8
変数の数=8

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
(1)	1.000	0.941	0.294	0.294	0.706	0.647	0.647	0.588
(2)	0.941	1.000	0.235	0.353	0.647	0.706	0.588	0.647
(3)	0.294	0.235	1.000	0.882	0.471	0.412	0.647	0.588
(4)	0.294	0.353	0.882	1.000	0.471	0.529	0.647	0.706
(5)	0.706	0.647	0.471	0.471	1.000	0.941	0.824	0.765
(6)	0.647	0.706	0.412	0.529	0.941	1.000	0.765	0.824
(7)	0.647	0.588	0.647	0.647	0.824	0.765	1.000	0.941
(8)	0.588	0.647	0.588	0.706	0.765	0.824	0.941	1.000

表3の類似度をもとに次元形容詞8語をクラスター分析(群平均法による)し、デンドログラムで表示すると図のようになる。この図から「みじかい」と意味的距離が近いのは「ちかい」であり、「ながい」と「とおい」もちかい。が、「ふかい」や「あさい」とは遠く、「たかい」や「ひくい」とはもっとも遠い関係にあることが分かる。

本稿では次元形容詞の(1)知的意味レベルでの意味の遠近関係について考察したが、意味の分野は複雑であり、本稿の冒頭で触れたような評価・感情的意味、文法的意味、表現的意味、地域的意味、文化的意味などのレベルでの語彙体系の構築と意味的距離に提示は、管見に入らない。総合的な語彙体系・意味体系の研究が今後の課題である。